

東京藝術大学×香川大学連携事業

[シ オ メ]
ART & SCIENCE

01 創刊号
SPRING 2026

SOME



特集

海洋から生まれたアート&サイエンス

TAKE FREE

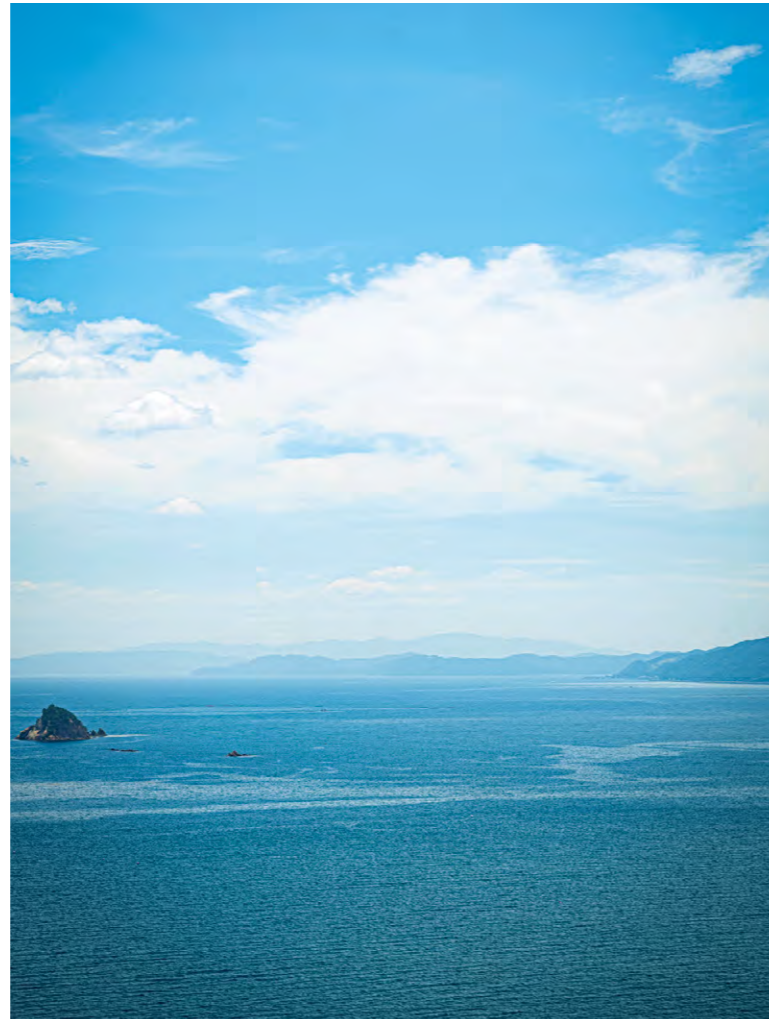
東京藝術大学長
日比野克彦

波打ち際は海と陸の力が絶えず行き交う。海中で描いた経験から、環境の違いが身体と道具の関係を変え、表現も変わることを知った。同じ身体から生まれながら異なる表現。しかしそれらは実は繋がっている。私は100メートルの紙を用い、陸から海へと描き進めるアートアクションを行った。境界では自然のエネルギーが身体にぶつかり、互いの力が交差し新たな力を生む。潮目も、アートとサイエンスもしかり。このSIOMEで100メートルのドローイングを描こう！



香川大学長
上田夏生

瀬戸内の穏やかな風景は、発見と創造の背中をそっと押してくれます。東京藝術大学と香川大学の連携プロジェクト(J-PEAKS)は、アートとサイエンスの交差点で地域の課題解決に挑む取り組み。互いの強みを重ねることで、「やってみよう」という小さな一歩が思いがけない変化を生み出します。SIOMEは、その芽生えやプロセスを皆さんと分かち合う場。気軽にページをめくりながら、私たちのチャレンジに少しでもワクワクしていただければ幸いです。



東京藝術大学 × 香川大学
ART & SCIENCE

東京藝術大学と香川大学の教職員たちが出会い、アートとサイエンスをつなぐ新しい取り組み「SIOME」が生まれました。海や地域をフィールドに、アーティストは感覚や表現で世界を捉え直し、科学者はデータで世界を読み解きます。異なる視点が交わることで、新しい問いや発見が立ち上がっていきます。SIOMEのロゴは、こうした協働の象徴として生まれました。赤はひらめきと情熱をもつアートのエネルギー、青は冷静に探究する科学のまなざしを表しています。二つの色が並ぶことで、異なる視点が交わり新しい発想が生まれる「潮目」の瞬間を表しています。このロゴの文字は、両大学の教職員が描いた文字をもとに形づくられました。



東京藝術大学と香川大学の15名の教職員が描いた文字でロゴマークをつくる

SIOMEのロゴマークは、東京藝術大学と香川大学の教職員15名が描いた文字から生まれました。個性豊かな文字を持ち寄り、その中のいくつかを組み合わせると一つのロゴを制作しています。手探りの中で独創的な発想が重なり合い、形になっていく過程そのものがアートとサイエンスの協働の始まり。楽しみながら描いた文字が、SIOMEの活動を象徴するロゴになりました。



TARA JAMBIO
ART PROJECT
とは?

科学探査船タラ号を運航するタラオセアン財団と、日本のマリンバイオ共同推進機構 (JAMBIO) が協働して取り組む、アートとサイエンスの共創プロジェクトです。科学的なデータだけでは伝わりにくい気候変動や海洋環境の複雑な現状を、アーティストが実際の現場体験を通じて作品化し、私たちの社会へ「自分ごと」として広く届けることを目指しています。

TARAってなに?

海洋保全と啓発を目的としたフランス発祥の公益財団法人です。2003年の設立以来、科学探査船「タラ号」を運航し、世界中の海を航海しながら気候変動や海洋環境、生物多様性に関する画期的な調査を行っています。最大の特長は、科学者だけでなく世界中から集まったアーティストたちが船上で共同生活を送り、共に海を見つめること。客観的なデータを示すサイエンスと、人々の感性に訴えかけるアートの力を掛け合わせ、海洋環境の重要性を世界に向けて発信し続けています。

TARA JAMBIO ART PROJECT

全国の調査に アーティストが同行

全国7箇所で実施された沿岸域でのブルーカーボン調査において、そのうち6箇所にアーティストが同行しました。科学者と共に臨海実験所などに滞在し、現場でのフィールドワークや地道な研究プロセスを共有しています。



科学者との共創が、 アーティストの視点を変えた!

普段は交わることのない科学者とアーティストが、探査船や臨海実験所という現場で寝食を共にし、同じ海を見つめる。この環境での「共創」が、決定的な視点の変化をもたらしました。専門家が扱う難解なデータや、泥まみれで行う地道なサンプル採取。現場での生々しい体験と日々の対話を通じて、アーティストにとって単なる美しいモチーフだった海は、直視すべき気候変動の最前線へと変わります。異なる言語を持つ両者が響き合うことで、科学の事実が感情を揺さぶるアートへと昇華される、深い気づきと対話のプロセスです。

特集1

科学とアートが交差する海 「TARA JAMBIO ART PROJECT」の挑戦

海洋研究の現場で、 アーティストは何を感じたか

[TARA JAMBIO ART PROJECT 参加アーティスト9名の作品]

制作された作品は東京藝術大学大学美術館で開催された「芸術未来研究場展2025」で展示された。

この発泡ブイは香川県の中高生と一緒に瀬戸内海や地域について学びながら制作を展開する「かがわアートスタディーズU18」の活動で収集したものです。庵治の無人島、高島に香川大の船舶で上陸し、皆で集めました。制作の方向性なども参加者の皆で話し合った結果です。発泡ブイはとても手間がかかるものです。大き過ぎて、バラバラと崩れやすく、牡蠣が付いていたり、虫が住み着いていることもあり。また、リサイクルも難しいため、ビーチ・クリーン活動でもそのまま残されることが多く、マイクロプラスチック発生の要因になってしまうとか。それでも、広い大海原を漂い、魚に日陰を提供、アリに温かい場所を提供したりも。浮力は300キロで、養殖イカダを支える役割も果たします。こんなことをしている自分は、一体何をしているんだろうと感じることもあります。

発泡ブイに、
私はなりたい

西原尚



1976年生まれサウンドアーティスト。生活とアートの境目なく、研究、録音、音楽制作、楽器制作などを行う。知らない人や文化、習慣に触れたいという思いを起点に、音を媒介とした展示やパフォーマンスを国内外で展開している。



写真：Yaroslav Kuzin



8-3 / 庭 Bluecarbonkey

鍵

- ・できるだけ物をつくらない
- ・できるだけ自然に還る素材
- ・いま在る物事との組合せ

在る物事：経験／記憶（影と光）／拾った物／感情／感覚／想像／文字／空間／矛盾
佐渡島滞在の最終日、6日間泊まっていた施設を出る15分前に鍵を失くしてしまった。8-3と記されたロッカーの鍵。滞在初日に渡されたその鍵は最終日にプロジェクトリーダーのWさんへ返却することになっていて、30分前まで部屋の机の上の目立つところに置いてあった。部屋を出る際、片手で鍵を握ったところまでは確かにあったのに、エントランスでWさんへいざ渡そうとすると……ない。ポケットにもリュックにもキャリアにもない。その場に居合わせた方々も一緒に部屋からのルートを探してくれたのに、鍵は見つからなかった。帰りの車やフェリー、新幹線で、この出来事を不思議に想っていると、ふと、ブルーカーボンキーという言葉が浮かんでくる。以来、ときどき青い鍵が脳裏をよぎっている。ある研究者が「ブルーカーボンはまだ分からないことばかり」と言った時から5ヶ月過ぎようとしている今、6日間の記憶から未来へ何を描けるだろうかと夢をみる。

泉イネ

旅のように描きながら分野や土地を渡り歩く。近年は服飾装画を手がけた45R シーズンカタログ原画展を工芸青花、Mizuho Oshiro Gallery、森岡書店で開催。2008年から続く制作より『本姉妹の本にまつわる話』（赤々舎）を発行。素描挿画を手がけた星座詩集を冬に刊行予定。



最も遠い地

わたしたちは、呼吸を通じた共喰いの関係にある。

あのとき感じた「呼吸がこわい」という感覚は、何者かを喰らっているという自覚から生まれたものだった。

息を吸うことは、何者かを喰らうことであり、息を吐くことは、わたしを何者かに喰わせることである。

わたしの左右の指を擦り合わせることは、無数の何者かによるマクロな回合である。

わたしはいま、海の底にいる。

川畑那奈

アニメーション作家。トランス・スケールな物語を生み出す装置として風景アニメーションを制作する。風景を媒介に、時間や空間の感覚を横断する物語表現を展開。財団法人カンセイ・ド・アジア文化財団第二期オフィシャルサポートアーティスト。



1986年大阪府生まれ、5歳より香川県小豆島で暮らす。鑄金作家／民俗史収集。富山大学および東京藝術大学で鑄金を学び、現在は小豆島に「宮の森鑄造工房」を構え、鑄金の素材採取を起点とした民俗史の収集と制作を行う。島のかつての暮らしを聞き書きする「しょうどしま民俗座談会」のメンバーとしても活動。

播磨灘の海底泥を分析する過程で出た銀や銅などの廃金属を素材に、小さな作品をつくりました。そして、研究と制作、二つの異なるプロセスが出会うことで生まれる新しい試みや、環境と私たちの暮らしをめぐる対話を、映像で記録しています。鑄金作家である私は、小豆島での制作を通して民俗史を集め、人々の暮らしとそれを取り巻く環境の変化を、語り手の物語として記録しています。瀬戸内に新しいかたちの融合的なアーカイブをつくりたい——そんな思いから始まったこの試みは、未来へと続くアーカイブの姿を、これからも探っていきます。

柴田早穂

瀬戸内の過去—現在—未来を つなぐアーカイブ Vol.1 海底泥の分析



共同制作・坪佐利治 中國正寿

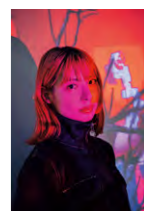


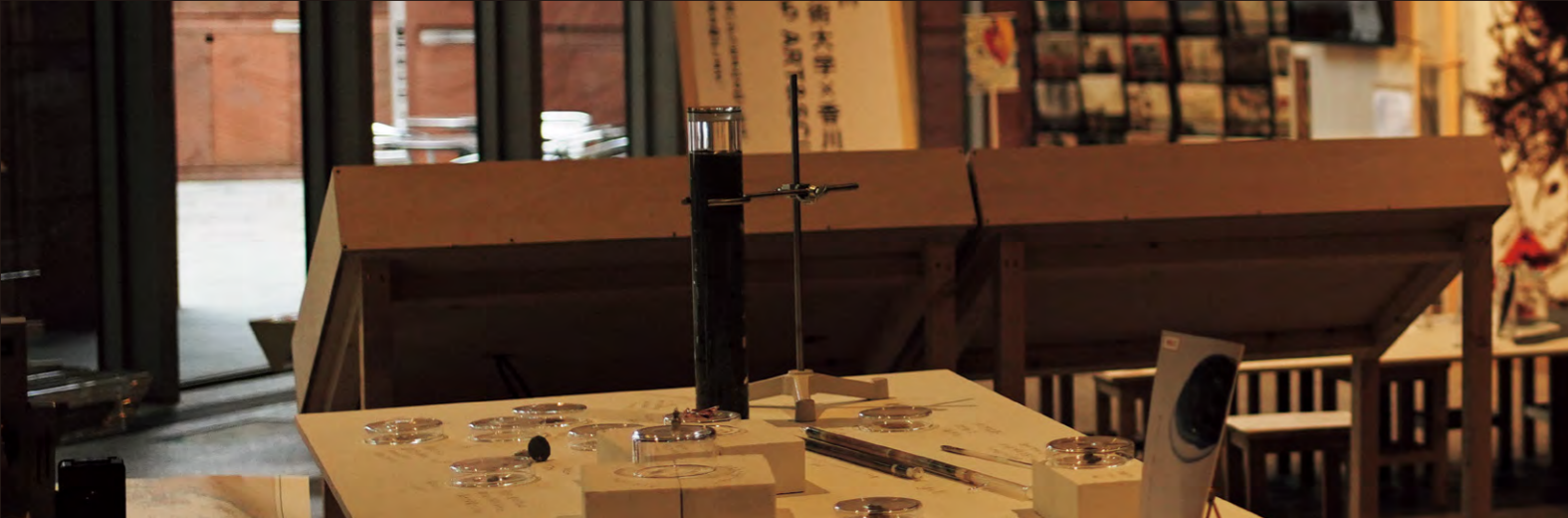
観測線のそとで

2025年6月9日から13日までの5日間、海洋研究者たちとともに瀬戸内海をめぐった。調査に同行して感じたのは、観測や測定のために引かれた線の外側で生まれる出来事の豊かさだった。研究者たちは、正確な一点のデータを得るために、膨大な作業を積み重ねていた。その傍らで教えてもらった、小惑星のようなライブロックの生態系や、海藻の色彩の変化に心を奪われた。肝心のデータ採取の現場では、酔い止め薬の副作用で眠ってしまい、何とも気まずい思いをした。けれどその観測線の外側で、私は記録には残らない光やかたちを追いかけていた。本作は、ドローイングと映像によって、その“観測線の外側”で起こる揺れや曖昧さを描きとめようとした記録である。そこにあるのは、観察と感覚のあいだに浮かぶ風景——科学の目と人の目のあわいで見えた、ひとつの海の記憶である。

菅野歩美

1994年東京都八王子市生まれ。2025年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。人から人に伝わる知識の総称「フォークロア」をテーマに、ドローイングや3DCGを用いた映像インスタレーションを制作し、物語や記憶の伝播を探究している。





私は全国4か所の海洋調査地に同行し、研究者と共に海を観察し、海藻の採取や仕分けを行いながら、海洋環境問題を“実感”しようとしてきた。しかし、豊かに見える海の印象は最後まで大きく変わらず、海藻が減少している実感も持てないままだった。この“見た目の美しさが現実を覆い隠す感覚”は、ガチャガチャ(カプセルトイ)が与える体験と驚くほど似ている。外からはワクワクする見た目だが、いざ開けてみると想像とは異なる現実が現れる。期待と現実のギャップ。その構造が、海の表層の美しさと、目に見えない深刻な問題との乖離と重なるように感じた。本作では、透明カプセルを“海の断面”として提示する。外側からは楽しげなカプセルに見えるが、開けると調査で採取した海底泥、マイクロプラスチック片、消えつつある海藻など、海中に潜む“見えない現実”が現れる仕掛けとなっている。鑑賞者がカプセルを“期待を抱いて開ける”という行為を通して、海の問題を自分自身の体験として受け取り、表面の美しさの裏側にある深刻な状況と向き合うことを促す作品である。



1981年岡山県久米郡生まれ。2007年東京藝術大学大学院修了。組織設計事務所を経て株式会社1221を設立。空間コミュニケーションを軸にデザイン・設計を行う。2025年より東京藝術大学芸術未来研究場特任准教授として科学とアートとの関係を探る。

海の美は、
海の痛みを隠す

井上裕史



2000年宮城県生まれ。東京藝術大学先端芸術表現科修士課程在籍。東日本大震災の経験や東北での旅や生活を通して、自然から感じる“ヌミノゼ”に関心を持つ。フィールドワークを基に絵画作品を制作し、地球科学研究にも同行している。

後藤理奈



アマモ：海→陸→海

「アマモ」という海草について、海から陸へ進化し、また海に戻った生物という話を研究者の方から聞いて、陸から海→陸へと戻った浦島太郎の逆を連想し、物語のようなものを制作。今年、個人の活動で同行したウミガメのバイオリング研究(東京大学大塚研究センター佐藤研究室)や、潮間帯の生態系についての臨海実習(筑波大学下田臨海実験センター)に参加したことから、その知識や出会った生物も作品の中に反映されている。また、今回は海藻・海草についてのプロジェクト&作品ということもあり、海藻由来の素材を取り入れた。さらに、女川での調査同行の様子と波ドローイング(船の上で波の揺れに沿って描いたもの)を卓上に並べて一覽できるようにした。今後も継続的に地球科学分野へ関わっていく予定。



- (1) 一つの目的に各地のサイエンティストや海のプロフェッショナルや、そしてアーティストなんかが集まったいきさつでのコミュニケーションや会合の姿はそれ自体テーマになりうるんじゃない? .Yさん
- (2) 陸上の植物の変化は皆見ているけど、海中の変化を皆意識していない .Nさん、Wさん、Iさん
- (3) 一本のロープが船上から見て不可視の世界を繋ぐただひとつのものに見えて .Sさん
- (4) ダイバーの目線だから絵に上下がない? .Iさん
- (5) 何万年というような時間に関わるデータを抜おうとしている .Iさん
- (6) オオモンハタのサイズ .Jさん、Wさん
- (7) コッペパンのペトバについて .Tさん
- (8) 植物と動物の研究者が同席する機会があって、新しい気付きがあり .Iさん
- (9) 水中の姿は自立していて形も色も違って、虹色だったりもする .Iさん
- (10) Googleのプラットフォームで論文を探せますよ .Nさん

※フレーズは、主に期間中のメンバーとの会話から。

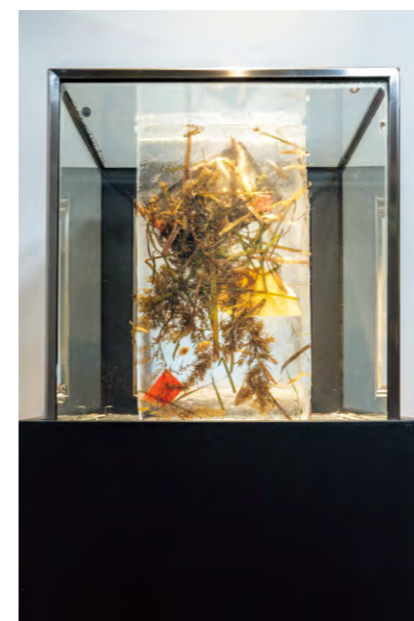
重力と虹色



中心点



1980年茨城県生まれ。2006年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、2008年同大学院修士課程修了。東京藝術大学特任准教授。油画専攻出身のアーティストとして制作と並行し芸術的思考プロセスを研究。香川県の「U18」などを通じ、環境観察から着想する教育実践と、誰もが表現に関われる場づくりを探究する。



海のアッサンブラージュ (瀬戸内海、2025年7月30日)

海に「潮目」と呼ばれる漂流物の集まる場所がある。そこには海藻や流木、そこに随伴する稚魚といった自然物だけでなく、プラスチック片や漁具の破片などの人工物も含まれる。本作品は、瀬戸内海における科学者との海洋調査によって採集された潮目の漂流物を再構成し、凍結させたオブジェを冷凍展示装置によって提示するものである。これは、通常は海の流動の中に消えてしまうモノ同士の関係を一時的に可視化する試みである。科学においてこれらの漂流物は分析対象となるサンプルであり、そこから普遍的な知見が導かれる。しかし、この作品が示そうとしているのは個々のモノではなく、モノとモノのあいだに、その時その場所ではかき生まれぬ関係である。瀬戸内海という閉鎖性海域では、流入する漂流ごみの多くが周辺の陸域における人間活動に由来する。はたして自然物と人工物という区別は可能なのだろうか。人間もまた例外ではなく、この物質循環の中に含まれている存在である。



間瀬朋成

東京都出身。東京藝術大学卒業・同大学院修了。東京藝術大学美術学部にて助教などを務めたのち、2025年より香川大学イノベーションデザイン研究所特命助教。近代の人間中心主義に対する批評的視点から、歴史や記憶、地質や海といった時間の層を主題に美術作品を制作している。

「海は題材から“現実”へ」

科学者との共有体験が動かすアーティストの視点

- 海洋科学と情報交換やプロジェクトへ同行する中で、アーティストの変化が見えてきた。
- 題材から現実へと置き換わっていった。

1. アーティストの心理変化

	海	環境問題	ブルーカーボン
<i>Before</i> プロジェクト参加前	美しい、詩的、象徴的	どこか遠い、ニュースの世界	知識としては理解、でも体温がない
<i>After</i> プロジェクト参加後	美しい面だけ見ていた自覚の芽生え	手に負えない無力感、当事者意識	海の痛みの拡大による恐怖

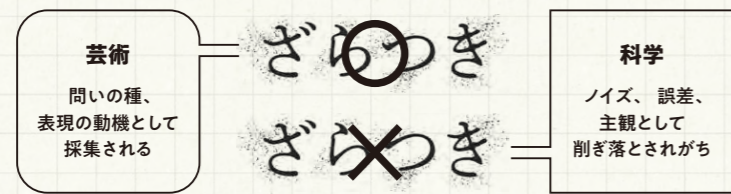
東京藝術大学 特任准教授 井上裕史

アーティストの転換点は

ざらつき

アーティストの転換点は現場で出会う“整えきれない現実”のうち、理解の手前で身体や感情に残り、無視できずに「引っ掛かり」として残るものを感じた時。それは「ざらつき」とも言い、その「ざらつき」の扱い方がアーティストと科学者で対極的であるように思う。

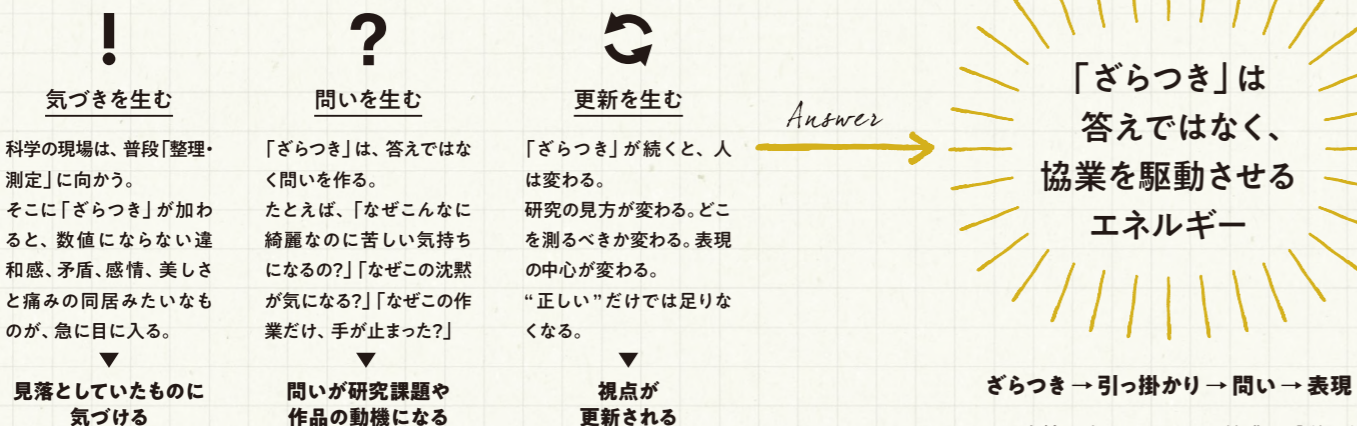
2. 「ざらつき」の両者間での扱いの違い



「知っている」から「感じ直す」へ

科学者は海を知っている。アーティストは海を感じる。その「感じ方=偏った主観」に触れたとき、科学者はずっと見てきた海を、改めて“感じ直す”。

3. ざらつきがあると何が起る?



ざらつき → 引っ掛かり → 問い → 表現

この連鎖が生まれることで、協業は「説明」ではなく問題の再定義（問いの育成）へ向かえるのではないか。

「海を前にして」

香川大学瀬戸内圏研究センター 助教 中國正寿

「海を前にすると、時々、どう見ればいいのか分からなくなる」。瀬戸内海の潮目の観測を共に行ってきた芸術家の間瀬朋成がそう漏らしたとき、私は内心で驚かなかった。というより、同じだと思った。私は研究者として、海を理解するための道具を持っているつもりだった。理論も経験もある。現場に立てば、何が起きているかを掴めるし、データも解釈できる。どこかでそう信じていた。けれど現実とは違った。頭の中のイメージと、目の前で起きていることの距離が大きすぎた。分かるはずなのに分からない。解釈しようとするほど遠のき、書けなくなり、自信が揺れた。似た感覚は、同僚の研究者にもあった。得意なはずのフィールドに入ったのに、言葉が追いつかない。これは自然科学一般にも通じる問題だろうが、海の場合は、研究対象までの距離が陸域よりも物理的に遠く、身近に感じにくい。それが実体験と頭の中との差をいっそう広げてしまう。

ただ、ずっと迷っているわけでもない。あるときデータに対する解釈がふいに立ち上がってきて、「これは新しい」と言える瞬間がある。発表できる確信が戻り、評価も得て、自信が回復する。けれど、そこからさらに時間をかけて現場に触れていくと、また別の問いが生まれる。長く海に関わってきた人たちは、どうしてこんな解像度で海を捉えられていたのだろう、と。以前は理解できなかった言葉が、遅れて腑に落ちる。「あのとき言っていたのは、こういうことだったのか」と。そして、自分が抱いた確信は薄かったのだということが静かに見えてくる。

アーティストは、場を変え、新しいものに目を向け、見たものや感じたものを作品にする、そう聞かされる。研究の分野

においても、そのように振る舞うことが多くある。けれど海の前では、その態度がときどき危うく感じてしまう。私はその回路に、かつて自分が「分かっているはずだ」と思い込んでいた頃感覚を重ねてしまう。だからこそ、海を語り切ってしまうことにより生まれる。

海は、「誰が語るか」で信頼の重さが変わる。香川大学の元学長で赤潮研究



の第一人者である岡市友利は、「研究者が海を知っていると驕ってはいけない」と言った。「いちばん海を知っているのは漁師で、海はまず漁師から教わらなければならないのだ」と。だからこそ彼は、漁師に最も敬意を表して接していたと私は聞いた。確かに、もし突然現れた人間が、いきなり海を理解したようなふるまいをとり、一方的に語って去るならば、漁師の目からも、その周辺か

らも、「浅い」と言われるのは避けられない。私たちが直面しているのは、研究論文や作品づくりの速度と、海を理解する速度のずれなのかもしれない。

間瀬の「Everything is Water: The Sea's Assemblage」*は、彼の瀬戸内海を題材にした初めての作品だ。本作のキャプションには『「海」が描く一瞬のアッサンブラージュ』と記されている。したがって彼の作品は、たしかに彼の作品なのに、彼だけの作品ではない。彼は、作品からいったん自分の手を離すことで、「海に描かせている」と言える。潮目で採取したものを氷に閉じ込めることで、環境そのものが、その瞬間の姿をこの世界に留めているのだ。

それは、海と私たちの関係を理解しようとしているからこそできる表現だと思う。もし「これが海だ!」という安易に結論づけたような作品が置かれていたら、たぶん私はそれに感化されていなかった。でも彼は、海に描かせることで、私たちと海の関係を、私自身に再認識させた。そして「誰が語るのか?」という問いを、海そのものに語らせようとした。私にはそれが、海と向き合う覚悟や誠実さを感じられた。これが芸術家としての対象への接し方なのかと思えば思うほど、作品の深さもそれに比例した。

海の前では、科学も芸術も同じところでつまづくのかもしれない。分かったつもりになっていた凝り固まった思考がほどけ、言葉や表現が追いつかなくなる。その経験を共有できるなら、協働は成果の足し算ではなく、「分からなさの共有」から生まれる新しい理解のかたちになり得るのかもしれない。

だから私たちは、海を語るのではなく、海が語り得る条件を整えるところから始めたい。今はそう考えている。

*作品：間瀬朋成「海のアッサンブラージュ（瀬戸内海、2025年7月30日）」の英題（P11）

異分野の専門家が「リアルな場」を共有する意味

海洋調査船での共同生活や「瀬戸内海分校プロジェクト」を通じ、密に時間を共有してきた東京藝大と香川大学。船上やフィールドという「リアルな場」で生まれた異分野の滲み合いについて、表現者と研究者の4名が語り合いました。

1年経って感じた異なる分野の専門家が「リアルな場」で過ごすことの意味

井上 現在、東京藝大と香川大学は「SIOME」という名称のプロジェクトを協業し、異なる分野の人や思考が混ざり合うことで何が生まれるかを探っています。リアルな場で一緒に体験し、長い時間を過

ごすなかで、人間関係や考え方など、いろんなものが「滲み合ってきた」と感じています。まさに潮目の中で生まれてきている多様性を、1年経ってようやく感じ始めました。この「リアルな場」で過ごすことは、人間だからこそ意味があるのでしょう。そもそも『TARA JAMBIO ブルーカーボンプロジェクト（以下、タラ）』は、科学者だけでなくアーティストやエンジニアも参加する海洋調査活動であり、複数分野の視点から海洋環境問題の解明および課題解決を試みる取り組みです。私は昨年4拠点に同行しましたが、同じ場所を共有ということは、ポジティブな面だけでなく、精神的なプレッシャーもありました。そのあたりのバランス



を掴んでいかないと、協業する場って難しいんじゃないかと痛感しました。この辺り、中国先生からもお聞きしたいです。

中国 海洋観測は1~2ヶ月船の上で生活することもあります。大体その時は研究者しか乗りません。今回のように異分野の人と一緒に宿泊を兼ねてやるのは、非常に新しい経験でした。中山さんや井上さんとは、下田の調査で初めてリアルに会いましたが、正直、研究者の側はみんな「藝大側は、いかなる生態なんだろう」と思っていました（笑）。潮目のように自然に混ざる心地よさじゃなくて、強制的に混ぜ合わせたような状況でしたね。

井上 「いかなる生き物なんだは、一体どういうふうにかき乱してくるのか」みたいな心配だったかもしれませんね（笑）。多分お互いそうだったんじゃないかな。確かに初回の下田はすごく緊張していました。僕は研究室の写真を一枚撮るのにも、「情報漏洩や研究に対する妨げになっちゃうんじゃないか」と心配になって、すぐお伺

いを立てていましたし。
中国 互いに生態が分からないからそのストレスが、場を共有するときに生じたのかもしれない。特に船は簡単に離れられない環境だから、人はぶつかり、仲直りし、協働せざるを得なくなります。それに、船内では、正しさよりも持続可能性が優先されることがあるんです。例えば、ロープがしっかり結ぶるとか、維持管理ができる人が優位になったりもする。押し込まれるからこそ人間関係の縮図が見える、まさに加速度実験的な場所ですね。

三垣 私の専門は宇宙心理学で、宇宙空間等の極限環境における心理を研究しています。宇宙船と海の船との最大の違いは「選抜」の有無ですね。宇宙飛行士は何千人から選ばれ、そこからさらに2年間の準備期間がある。チームビルディングやストレスマネジメントの訓練を経てから向かいます。タラの場合は、科学者もアーティストも毎回変わる。入れ替わりが激しい分、イノベーションが起こる確率はあるかもしれませんね。



1. 井上裕史

東京藝術大学特任准教授。美術研究科デザイン専攻出身。株式会社1221代表。芸術未来研究場にて主にアートと海洋科学との共創による社会実装を推進し、新たな価値創出に取り組む。

「似てはいけない」その作法を解いて観察へと辿り着く

中山 美術の文脈では、一緒の空間にいる人の中で「似てはいけない」という意識が常にあるんですよ。決して同じ“言葉”は使わないというような気持ちがある。でも今回、他分野と関わり、観察する中で「吸収しよう」ってスタンスに自分が変わりました。これまで、人の言葉や考え方を使うのがネ



2. 中山開

東京藝術大学特任准教授。油画専攻出身のアーティスト。自らの制作と並行し、芸術的思考プロセスを研究。香川県での「U18」等を通じ、環境観察から着想を得る教育実践と、誰もが表現に関われる場づくりを探究する。

ガティブなことだったけど、それが自分の糧になると思えるようになりましたね。

井上 たしかに科学はベースとして、先行事例を引用するなど、言葉の定義がピシッと決まりますね。私の携わっているデザインや建築といった領域も相手にクリアに伝えようとしますが、アートとはまた違う気がします。

中山 ええ。デザインはストレートに伝える、クリアなものに乗っていくとする。アートの場合は、言語に対してどう解釈ができるかの幅を作ろうとする場合がある。デザインもアートも広義で同じジャンルにいるはずなんだけど、その違いはありますね。それが科学になった場合どうなるかに興味を湧きました。観察から仮説に至るインスピレーションの部分は、意外と近かったりするんじゃないかな。

井上 中山先生は、よく「観察」というワードが使われていますね。

中山 芸術というものがどういう特性を持っているのか、言語化しないといけなような気がしています。アートでやっていることの核心は、観察してそこにインスピレーションを得るプロセス。そこが一番重



3. 中國正寿

香川大学助教(沿岸生物地球化学)。瀬戸内海を中心に海洋環境の調査研究の最前線に立つ。アーティストとの協働を通じ、科学データの可視化や表現の拡張、次世代への環境教育のあり方を模索している。

要なのではないか。それは、自分を客体化して見たときに、浮かび上がる言葉な気がします。

井上 「知る」というのは一方通行なんだけど、「観察」は多分、自分自身も含めた広い観察というのがあるんですね。

中山 歴史とか、自己を一回客体化した状態で見るとか、環境に対して主体の自分がいたときに。そういうのは科学とかでもそうなのではという気がしています。整理していく必要性を感じているというのは、この関わりがあるから出てきているような気がします。

三垣 研究者としては、普段は“しきたり”に則って申請書を書いて、きっちりしたものの中に自分を落とし込んでいくみたいな作業をしてきました。アーティストの方がしきたりを取っ払って、やりたいことに向かって突き進んでいる姿に、自由さを感じていましたね。

井上 僕は逆に、**科学者の方は専門領域以外のことには、仮説であっても発言されないスタンスが新鮮に映りました。**

三垣 やっぱり、分かったような気になってはいけないと思っているん

です。その専門の方の話をしっかり聞いて、勉強してから入っていきたいという思いがありますね。

井上 芸術側は他人の領域であろうと、自分がこうだろうと思ったところは自由に踏み込んでいく。答えがないという視点で発言できる。**論文には載らない「無駄」と思われる情報のなかにこそ意味があり、そこから思想が混ざり合ったりするのかなと思います。**

アーティストを 体現するために あえて残した余白

中山 私は『かがわアートスタディーズU18』に関わっています。もともとは「瀬戸内海分校プロジェクト」という形で、藝大推薦のアーティストが香川の中高生とチームを組み、リサーチから展示までを共にするプログラムです。美術だけでなくダンスやサイエンスも含む「アーツ」を扱っています。今年のプログラムは、非常に時間軸を長く設計しました。

井上 たしかに「こんなにゆっくりでいいんだろうか」と戸惑うくらいですね。中山さんは長くアーティストと過ごす時間を作ろうとしているように思います。

中山 短い時間の中で詰めてしまった場合に、アーティストは作品としての完成を強く求めてしまうような気がして。そうすると、受講生はアーティストのアイデアを体験するだけになる。アシスタントやインターンシップではなく、**「受講生がアーティストを体現する」状態にならないと、能動的**

なアプローチになりません。 そうするための構造を考えたとき、時間がある。アーティストと接触する「余白」のような時間が、絶対に必要なんです。

井上 僕はデザイン学が専門なので、つい問題解決に向けて、素早く答えを出すプログラムを設計しがちです。ゴールを自分で決めて、そこに早く到達させるのがデザイン的な思考なので、中山先生の「人と違うものを作るために時間をかける」というアプローチは対照的で、学びの一年でした。

中山 アートを考えるには「見たことないものを作る」姿勢が必要で、それにはすごく時間がかかる。受講生にアーティストのプロセスをスケールダウンして教えるのではなく、同じ目線になって**「同じ視座に立たせる」**。受動的な教育とは違った方法論があるんじゃないかなと思っています。

知の引き出しを クロスさせて 社会実装を早める

三垣 研究も様々な制約の中で行い、発想が生まれる瞬間はあります。論文執筆の手が止まったとき、一旦寝かせて、自由な時間を作る。そういう時間を過ごしている間に、「あっ!」と、ひらめくことがあって。そこがアートと通じる部分かもしれません。

中山 作品制作のインスピレーションと一致するなと思いますね。観察している要素からいきなりジャンプするときって、そういう「ひらめき」が起きてきていま

クロストークは、船と芸術未来研究場せとうちで行われた。三垣さんが研究する密室空間の心理作用を念頭に置き、異なる環境を舞台に選んだ。この効果があったか、どちらの会場でも活発な議論を繰り広げた。



すね。アーティストはそれを自分の環境の中から常に作り出さなければならない。科学の中でそういうひらめきに至る状態がどうなっているのか個人的に興味があります。

井上 そのスピードを上げるためにコラボレーションをしているのかもしれないですね。アーティストが何年もかけて自分の根っこを見つける時間を、科学者の引き出しを借りることで加速させる。デザインも、ベテランになると自分の引き出しが増えて早く回せます。同じように科学者の引き出しと一緒に使えれば、社会実装までのタイムラインを早められるんじゃないかなと。

中国 未来の子どもたちに、自然や対象物を観察するための見方の道具を渡すことが大事だと思っています。研究は、精度を上げるほど機械などに支えられる面が強く、入口が少し狭くなることがありますが、芸術は、観察から表現へと至るプロセスが直感的で、入口を開きやすいというのがあるかなと思っています。お互いの

引き出しを、お互いが観察し合ったものをクロスさせられたら面白いですね。

三垣 ただ、技術を提供し合うだけでは共同ということにはならず。プロジェクトの中でシェアし合うだけではなく、もう一歩先の混ざり合い方みたいなのが必要なんじゃないかなって。

井上 「科学者はこう」「アーティストはこう」は単なる先入観ですね。一人一人のパフォーマンスを混ぜ合わせていければ、突破口が見えてくるのかもしれない。

敬意をベースに 次の世代へつなぐ 私たちの責任

中国 こういう協業を知ってしまった責任というのは、非常に面白いですよ。いかにこれを次の世代に伝えられるか。二つの大学がサイエンスとアートで次世代を巻き込んでやっていくことに、今後の50年ぐらいは何らかの責任があるのかなと思っています。それをどうパッケージ化していくのか、どのタイミングから巻き込んでいくのか。そこは今後、皆さんと一緒に考えたいところだなと個人的に思っています。

井上 心理的安全性を担保する人間関係が一番必要ですよ。下田の1回目はお互い何も知らず、心理的ストレスがありました。1年続いてようやく相手の課題や大学のご事情もわかってきた。両者の観察がまず一通り進んだんじゃないかなって。安全性が担保できたら、2年目は

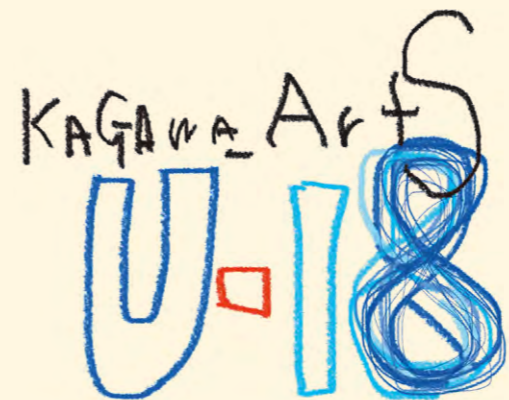
違う切り口で取り組みそうです。

中山 「どういう形にできるかがやっぱり見えなくていいんだよな」と。それぞれ違うっていうのがわかっているのはいいことだし、敬意を前提としてやっている。リスペクトがベースにあるから、お互いの芯からできたものを消化できる可能性が見える。そのプロセス自体に対して、気分がいいんですよ。

三垣 心理的安全性の定義は「言える関係性」ではなくて「言ってもいいんだと思える」自分のスタンスみたいなもの。それはリスペクトに近い。中山さんのお話を聞いていても、アーティスト側も研究者側も、お互いにリスペクトがあったからこそ、心理的安全性が保たれ、うまくいったのだと思います。楽しめる人たちが集まって初めて協業できるのかな、と。

中山 そうですね。作品も展示という区切りで出しますが、それは完成しているわけじゃない。到達してしまえば終わってしまうけれど、モチベーションがある限り、ずっと循環に向かって続いていく。それは子どもの頃に図鑑をずっと見ていたり、何か作りたいと思っていたのと地続きのことをやっている。前の世代にもらったことを次の世代にやるっていう動きがあっただけじゃないかな。私はそう思いますね。

井上 結局は「自分がやりたい」とならない限り、継承は続かない。共有することの喜びを僕らが体現し、後輩たちに「自分もやりたい」と思えるマインドをどう作ってあげられるか。それが、起案したメンバーに必要な役割なんだろうと思います。来年度、そしてその先の50年へ向けて、この「SIOME」をさらに広げていきましょう。ありがとうございました。



測れないものを手渡す

香川県・東京藝術大学・香川大学による「かがわアートスタディーズ U18」。アーティストと香川県内の中高生がチームを組み、瀬戸内海をテーマにリサーチから展覧会までを長期間かけて行う。対等な仲間として向き合った制作の現場を、3人のアーティストが語る。

編集部 中高生と一緒に作品を作るという今回のプロジェクト。これまでもこういった機会はありましたか？

西原 子どもたちとのワークショップはあります。ですが、「子ども用」のプログラムはあえて考えませんでした。大人が本気で楽しんでいれば、子どもも楽しいからです。東京大学で楽器作りの授業をやる際も、子ども向けと同じプログラムです。東大生は勤がいいけれど、結果的には小学生と同じミスをする(笑)。ネジの締め加減、音の微調整といった「勤どころ」は、大人も子どもも関係ない。

編集部 柴田さんは普段は鍛造作品が主でしたね。

柴田 ええ。各地で素材を採取し、環境や暮らしの中で集めた素材で形を作り、そのプロセスごと展示しています。私も子どもたちと一緒に鍛造ワークショップをすることがありますが、そこでもプロセスを伝えようと思っています。鍛造は砂を使うので地質の話をしたり、その土地の記憶を感じ取ってもらい「風景の記録」として作ってもらったり。いつも「土地のアーカイブを作る」気持ちでやっているんです。今回は比較的長いプロジェクトだったので、制作だけでなくみんなとフィールドワークに行くことができてとても楽しかったですね。菅野さんは初めて？

菅野 はい。私は初めて中高生と一緒に作りました。私自身、つい最近まで学生だったので、最初は「先生」と呼ばれることに抵抗があった(笑)。「仲間として作ろう」と伝えたら、本当にチームが主体的に動いてくれました。私が指導するというより、みんなの中に生まれたものを段取りして形にした感じです。最初は「粘土でアニメを作ろうか」

と考えていたのが、対話を重ねるうちにボードゲームに行き着きました。普段私は3DCGを作っていますが、今回は手で触れるアナログなゲームになりました。アナログですので、みんなが自由に作り出すと、時々收拾がつかなくなる。子どもたちが右往左往しているのを見ると、「これって自分が普段やっていることと同じだな」と感じました。自分もアートを作る時は右往左往して作品を作っているよなって。子どもたちを通して、客観的に自分の制作を見ているような感覚がありました。

編集部 西原さんはどんな作品を？

西原 僕は、発泡漂流物を使って作品を作りました。それから音が出るんです。ビーチクリーンの時、漁師さんが使う大きな発泡スチロールゴミは、処理が大変で拾われないそうなんです。だから浜辺には大きな漂流物が残っている。それを見た時、音が響くだろうなと目をつけていました。その中にスピーカーを仕込み、学生たちが録音してきた「日常の音」を流すことにしました。バスケット部の練習の音やお琴の音を持ち寄ってもらって、漂流物から彼らの生活の音が聞こえてくる作品になりました。

編集部 「瀬戸内海」というテーマがありました。子どもたちの反応はどうでしたか？

菅野 私たちは調査船に乗せてもらって「瀬戸内海、面白い!」と思っているんですが、子どもたちにとっては「生活からは遠い、ただの海」なんです。でも、制作中に香川大学の先生がレクチャーをしてくれて。「瀬戸内海はひょうたん型で、こういう潮流がある」と教えてもらった瞬間、ボードゲームの「コマの動き」と「潮流」がリンクしたんです。「台



アーティストと中高生、 1年間の共同制作

Artist **菅野歩美 / 柴田早穂 / 西原尚**



4. 三垣和歌子

香川大学特命助教。専門は臨床心理学、宇宙心理学。宇宙空間等の極限環境におけるクルーの対人関係や、離島への移住者のメンタルヘルスについて研究。「SIOME」では心理学の知見を軸に、異分野が混ざり合う共創プロセスの分析を試みる。

風が来たらこう動くんじゃない?」と、瀬戸内海というテーマが作品に降りてきた。あれは子どもたちにとって、「ただの海」じゃなくなった瞬間でした。

編集部 柴田さんは制作からなにか感じたことはありますか?

柴田 制作も楽しかったけれど、この2人とやれたことが大きかったですね。それぞれ考え方も違いますし、影響を受けました。毎回反省会をして「もっとこうできたかも」と話し合ったり。すごく尊敬できる2人です。

菅野 最初に3人でカフェで会った時、かなり不思議な雰囲気でしたよね。どこに行っても「何のグループだろう」と思われてた(笑)。会社でもないし、年齢も雰囲気も違うし。私も2人からめちゃくちゃ学びました。

西原 よくぞ、この3人を選んでくれたと思いますね(笑)。

菅野 作品作りだけでなく、子どもたちと対峙しなきゃいけない瞬間もありました。例えば「これが当たり前だから」って子どもが言った瞬間に、「当たり前って何?」ってなるわけです。ちょっと話そうか、みたいな(笑)。子どもは「大人の正解」を出そうとするけれど、「それって本当?」と問いかけ続けました。そういう瞬間が、自分の中で大事なポイントだったと思います。

編集部 そうやって「当たり前」を問い直す経験は、子どもたちにどんな影響を与えられますか?

西原 今の世の中、「お金」や「時間」など、数字で見える物差しで結果を出すことが求められがちですよね。でも、美術の結果はすぐには数字になりません。今の社会の「結果を測る物差し」は、もう行き着くところまで行っている気がします。そこに「次に何を付け足すのか」、その新しい物差しをみんなで作るのがこのプロジェクトの意味なんじゃないかと思っています。

菅野 西原さんのおっしゃる通り、影響は「測り知れない」というのが重要なんです。例えば、この子たちが50歳になった時にふと「そういえば、変な大人たちがあんなこと言ってたな……」と思出すかもしれない。私たちはそういう瞬間を狙っているんです。だから、直後にアンケートを取っても、本当の影響なんて分かるわけがない。無意識のうちに影響されている。それでいいんです。

柴田 うん。今すぐ何かが劇的に変わるというより、長い人生の中でちょっとだけ考え方の角度が変わるような体験ができれば、この先の振れ幅が生まれていくと思うんです。きっかけさえあれば、人はいくらでも自分で進んでいけるでしょうから。

菅野 今回、子どもたちは「ただの海」だった瀬戸内海に、知ることによって近づいていきました。この「近づく方法」を一回体験できたことが一番の財産だと思います。海だけじゃなく、自分とは違うと思っている人や場所に対しても、同じアプローチで近づいていける。そう分かってもらえたらいいと思いますね。



写真中/右: 宮脇慎太郎



菅野歩美

アーティスト/映像作家 1994年生まれ。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。土地に残る伝承(フォークロア)や怪異をリサーチし、映像インスタレーションとして再構築する「オルタナティブ・フォークロア」を制作している。



柴田早穂

美術家/宮の森鑄造工房 1986年生まれ、小豆島育ち。東京藝術大学大学院博士後期課程(鑄金)修了。地域の環境や人々の暮らしなど、土地の記憶を「鑄造」という技法でアーカイブする作品を制作。「しよとしま民俗座談会」メンバー。



西原尚

サウンド・アーティスト/東京藝術大学・東京大学非常勤講師 1976年生まれ。東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。「音」をテーマに、楽器製作やパフォーマンス、サウンドインスタレーションなど多岐にわたる活動を展開。

それぞれのまなざし

参加者、伴走者がプロジェクトを語る

参加した生徒たち、そして伴走する県職員。

このプロジェクトで何を感じ、何を見つけたのか。

それぞれの声をお届けします。

地元なのに知らないことだらけだった

堀家旺太郎さん

僕は高校のデザイン科に所属しています。将来はデザイナーになれたらと思っています。このプロジェクトに参加したきっかけは、去年参加した友人から「いいよ」と聞いたことでした。自分の地元のことは知っていると思いがちですが、香川のことを改めて見てみると知らないこともいっぱいある。新しいことが知れるよと言われて、今回参加しました。参加者はみんなデザインや芸術が好きという共通点があるので、話しやすいし意見交換もしやすいですね。僕たちのチームは無人島で拾ったパイプの中にスピーカーを入れて、香川の海の音や踏切の音、街行く人の声を流すという作品を作りました。音をアートとして使うのは初めてでしたが、鳴るはずのない音がパイプから鳴るといいます。チームはとにかく明るくて、アートという目的があるからゴミを拾っていても興味深く感じる。もし、アートに興味があれば「汚いゴミだなあ」と思ったと思います(笑)。みんな好奇心旺盛でいいチームでした。香川に住んでいると知った気になっている部分がありますが、改めて見直すと知らなかったことがたくさん出てきて、学びにもなったし楽しい経験でした。参加を考えている人には、とにかく何でもいから参加してみてくださいね。

何かを見つめ直すきっかけに

香川県政策部文化芸術局文化振興課 木内亮太さん

この事業は芸術家を生み出すことが目的ではありません。参加した生徒たちが自分の興味のあるものに触れるきっかけを作ることが重要だと考えています。今回は、1月1回計4か月にわたって開催したことで、次回のワークショップまでに自ら調べたり、考えたりする時間がとれたことがよかったです。生徒たちが主体的に関わっていく様子が見え、いい経験になった」という声を多くいただいたのが嬉しかったですね。参加した子どもたちの中にも「作家になりたい」という方もいれば、「研究者になりたい」という方がいてもいい。「ボードゲームを作りたい」子がいてもいいですね(笑)。いろいろな道があってもいいですし、どれも香川県にとってプラスになると思います。子どもたちが芸術を通して何かを見つめ直すきっかけになれば幸いです。

答えがないからアートは楽しい

本多永佳さん

私は中学生で、アートが好きです。アートは自由に解釈できますし、「この人はどんな考えでこの作品を作ったんだろう」と想像するのが楽しいんです。今回のプロジェクトに参加したきっかけは、昨年参加した友人から誘われたことでした。一緒に展示を見に行くと気になる作品がありました。人にインタビューをしてそこから連想された絵を描いている作品で、「こんなのが作れるんだ」と感動しました。参加者は先輩ばかりでしたが、みんなアートが好きだからか年の差は関係なかったです。私は柴田早穂先生のチームに入りましたが、先生はふわふわした雰囲気の柔らかくて優しい方でした。先生が専門にしている鑄金のことは知らなかったのですが、樹脂から形を作ること、真鍮という金属が熱で色が変わることなど、全てが驚きでした。学校の授業だと多くが正解はひとつ。だけど、アートは何でも正解じゃないですか。それがすごいなと思います。来年は高校生になるので、また参加したいです。

ゼロから作るから愛がある

菅原幸さん

3年連続でこのプロジェクトに参加しています。きっかけは、高校1年生の時に学校でチラシを見たことでした。高校生だったらいろんなことにチャレンジしてみようと思って応募しました。私自身、中学校の時はあまり友だちと喋らなくて、一人でいることが多かったんです。高校に入ったら、中学校より楽しく過ごしたいという気持ちがあった。参加して良かったと思います。好きなことで集まっている人たちとは、自分もこんなにもいっぱい喋れたり、積極的になれるんだなと思いました。このプロジェクトのいいところは、大人もいるし、大学生もいるし、カメラマンがいたり海洋学者がいたり、いろいろな人が集まっているところです。今回はボードゲームを作ったのですが、これまでのプロジェクトの中で一番、自分との距離が近い気がしました。ディスカッションを積み重ねて、みんなでゼロから作ったという印象が大きいですね。普段、ゲームで遊ぶことはあるけど、自分で作るのはあまりないので、何かちょっと愛がある感じですね(笑)。改めて思うのが、すごくいいチームだったってこと。最初はみんな緊張気味だったけど、話していくうちにほぐれていって、みんなが話しすぎて時間を食っちゃうくらい。だからこそディスカッションが占める時間が大きく、良い作品が生まれたのだと思います。

中山開(東京藝大)×柴田悠基(香川大学)

香川県・東京藝術大学・香川大学による瀬戸内海分校プロジェクト。

アーティストとともに、フィールドワークや作品制作、展示会の準備・開催に至るまでの一連の流れを実践的に学ぶプロジェクトを見つめ続けてきた2人にはどのようなものが見えているのでしょうか。

サイエンスがアートと出会う 柴田 4年間、このプロジェクトに関わっていますが、学生の参加者たちから意外な意見を聞きました。アーティストだけでなく、スタッフなどの大人たちを含めてプロジェクト自体が「面白かった」「楽しかった」という意見が多数あったんです。作家と学生の関係だけでなく、全体が面白いです。これは予想外でした。

中山 作家からも、いろんな階層で文化的な関わりの面白さが起きているのが見えましたね。参加者、作家、スタッフと役割は違っても、有機的に絡まり合った大きな場ができていっているように感じます。そもそも、このプロジェクトは「アート」を生み出すことだけを目指しているわけではなく、結果としてアートと捉えられるならそれでいい、という姿勢がありますよね。

柴田 ええ。参加する中高生には「無理にアートを目指さなくてもいい」と伝えています。アート志向の子もいれば、ただ楽しいから来る子もいるわけですから。

中山 たしかに、作ることの面白さはアートに限らない。ただ、この環境では作る喜びが一番濃く詰まっているのがアートという形でしょう。そう思うからこそ、作家や参加者たちもここにいるのでしょう。その感覚は科学や学問の面白さにも通じますね。しかし、作品を発表するわけですから作家はどこかで応えなきゃいけないプレッシャーがあるので、それが枷になる場面もある。

柴田 作家は「失敗」したくないから。

中山 ええ。なのでスケジュールが厳しいと、すでに持っている手札を使って参加者と作品を作る構造になりやすい。ただ、香川のフィールドから情報を得て、ゼロからイチと一緒に考える形ができるので、作家として能動性も変わるはずですよ。

柴田 たしかに。全ては作家のスタンス次第ですね。この環境を受け入れられない作家がいる一方で、あるアーティストが「この体験が糧になっている」と言ってくれた。自分の作品作りを見つめ直して、新しいやり方を持ち帰ってくれる作家も多いですね。

無理にアートを目指さない 中山 今の時代、作家が個人や作品という枠組みを解体して、別の構造で価値を作る流れがあるように思う。本プロジェクトは複数の階層で様々な変化が起きている

状態そのものが面白いと感じています。互いが柔らかく結び合う枠組みが起きている。香川大学に籍を置く柴田さんは、サイエンス分野がアートと出会ったこの機会をどう見えていますか？

柴田 サイエンスに留まらず、地域全体がアートと出会い、当事者性が高まったように思いますね。自治体や香川大学サイドは「アートはわからない」と言いがちです(笑)。しかし、自分のトリートリーで判断するのではなく、プロジェクトメンバーとして判断する発言が増えたように感じる。

中山 みなさん、「アートはわからないなあ」といつつも、何が面白いのか、分かり合っている感じがします(笑)。

柴田 僕は藝大から香川大学に「異物」としてやって来たわけですが、僕自身は変わってないのに周りが変わり、理解しようとしてくれている。特にJ-PEAKSが始まってから「アートとは何か」をみんな真剣に考えている。今、すごく面白い状態です。

中山 これからのビジョンは？

柴田 「広げていく」ことですね。受講生を増やす、違う地域に広げる、そういう展開を考えています。参加した中高生が大学生になって戻ってくる可能性もあるし、アートを目指していなくても「好きだから」と、関わり続ける。そんな未来があると思う。

中山 このプロジェクトは、ずっとみんなが考え続けているブレインストーミングのようなもの。そんなイメージが連鎖する状態が、もっと機能したら面白いですね。アーティストが個人の中でイメージを拡張させようとしてきたプロセスが、他ジャンルとの融合でシステムになる可能性がありますね。

柴田 今後は藝大が招聘した作家だけでなく、香川大の科学者チームも入れたいですね。アーティスト、科学者たちが集合体として「考える」と、刺激もあるし組織の姿勢もさらに変わるはずですよ。

中山 いいですね。科学者志望の参加者も混ざったら、意識の変化が起きて何かさらに違うものが見えてくるでしょうね。

柴田悠基 香川大学創造工学部 准教授、現代美術作家。「情報社会が社会に与える影響」をテーマに幅広い手法で芸術表現を行っている。趣味は釣り。新しいタイラバの世界を開拓中。

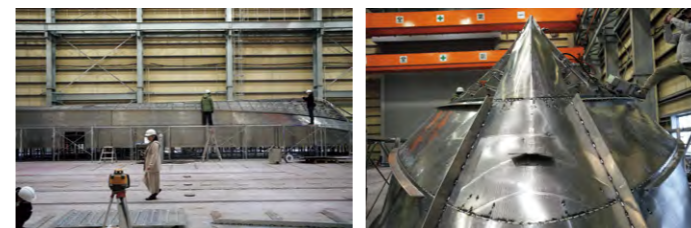
*中山開のプロフィールは p11 に掲載



SIOME Topics

Topic 1 | 海と向き合うための新しい船、建造が本格化

香川大学の新しい海洋調査船プロジェクトが本格的に進んでいます。「カラヌス3」に代わる新船は、「海にいちばん近い調査船」をコンセプトに、香川大学と東京藝術大学が設計段階から協働。最新の調査機能に加え、アート制作や展示ができる空間を備えた「共創の船」として誕生します。2階の開放的なアートデッキ、船尾の水面近くで観測できるステージなど、調査と表現の新たな可能性が広がる設計です。完成は2026年9月予定。海と人、科学とアートをつなぐ新しい船の誕生が近づいています。



Topic 2 | アート×科学×金融が交わる、新しい海の未来づくりブルーカーボン連携協定

東京藝術大学、香川大学、日本政策投資銀行(DBJ)は、ブルーカーボン事業の推進に向けた連携協定を締結しました。東京藝大はアートで海の現状や再生を「見える化」し、香川大学は藻場造成技術で科学的な海の再生に取り組み、DBJは環境価値の定量化や事業化を支援。学×学×金の連携で、地域から国際へと広がる価値を創出し、カーボンニュートラル社会の実現を目指します。



編集後記

海は、私たちにとって長らく「美しい風景」や「研究対象」として存在してきました。しかしTARA JAMBIO ART PROJECT、かがわアートスタディーズ U18、調査船カラヌス4、そしてブルーカーボンの協定へと広がる取り組みの中で、海は「ともに考え、ともに変えていく現場」へと姿を変えています。科学はデータで海の変化を捉え、アートは感情や想像力でその意味を社会へとひらく。その交差点に立

つことで、環境問題は遠いニュースではなく、自分ごととして立ち上がってきます。本誌に並ぶプロジェクトは、知識と感性が出会うことで生まれる新しい問いの記録です。海洋科学とアートの協業は、課題解決の手法であると同時に、社会の関わり方そのものを更新する力を持っています。この小さな一冊が、海と未来へのまなざしを変えるきっかけとなれば幸いです。

SIOMEとは?

SIOMEは、東京藝術大学と香川大学が連携し、アートとサイエンスを軸に、異なる流れの交差(潮目)で課題解決を「ともに考え、ともに実践する」取組の総称です。文部科学省・日本学術振興会「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」の採択を受け実施しています。瀬戸内には豊かな自然と文化がある一方、環境変化や人口減少等の課題もあります。科学の分析力とアートの創造力を合わせ、環境保全や島の暮らし等を新しい角度から捉え直し、地域の人々と企業・自治体との共同実践を重ね、地域の知恵と大学の専門性を繋ぐ持続可能なモデルを探ります。瀬戸内の自然と文化を未来へ繋ぐためアートとサイエンスの融合から新たな価値を生み出すことを目指しています。



PROJECTS OF SIOME

① 海洋環境

瀬戸内海の生物多様性、ブルーカーボン、海洋ごみなどの課題を科学調査とアートの視点から探究し、環境保全と新しい海の活用モデルを創出します。

② 離島環境・過疎地

島の暮らし、医療、モビリティ、DX、観光など離島特有の課題に向け、地域と協働しながら実証と研究を行い、持続可能な瀬戸内海の未来像を描きます。

③ 人材育成

アートとサイエンスを横断する学びの場をつくり、子どもから若者、企業人まで、多分野協働で地域づくりに貢献できる人材を育成します。



監修：日比野克彦(東京藝術大学)、橋本和幸(東京藝術大学)、寛善行(香川大学)

編集長：井上裕史(東京藝術大学)

編集：柴田悠基(香川大学)、林裕樹(香川大学)、三谷なずな(香川大学)、三木麻紗子(東京藝術大学)、井上英樹(MONKEYWORKS)

アートディレクター：樋笠影子(海と例) 表紙写真：大沼ショージ

発行：東京藝術大学、香川大学 印刷：藤原印刷

お問い合わせ：SIOME編集部 (Web: <https://setouchi.ac>)

本冊子の一部または全部を無断で複製・転載・翻案することを禁じます。

All rights reserved. Unauthorized reproduction, distribution, or adaptation of any part of this publication is prohibited.

